

# 平成 30 年度 全国研究集会・総会

---

## 実施報告書

平成 30 年 6 月 9 日（土）～10 日（日）

日本レクリエーション協会 公認指導者養成課程認定校研究連絡会議

---

## 報告書の発行によせて

---



日本レクリエーション協会 公認指導者養成課程認定校研究連絡会議  
幹事長 / 仙台大学 教授

### 仲野 隆士

平成 30 年度の全国研究集会が 6 月、立教大学池袋キャンパスにて開催されました。開催に当たり、実行委員長を務め会場を提供して下さった立教大学の松尾哲矢先生に深く感謝の意を表します。松尾先生と私は同年齢で、学会等でも顔馴染みでした。そのような縁もあり、平成という元号最後の全国研究集会は個人的に忘れ得ぬものとなりました。

実行委員長を筆頭に、関東・甲信越ブロック幹事の先生方による実行委員会が知恵を出し合い設定して下さったプログラムは実に盛りだくさんで内容も素晴らしかったです。タイムリーな話題の基調講演と翌日の体験プログラムが連動していたこと、3 分野でのユニークなワークショップ、ハリーポッターの映画に出てくるような格式高い大学ホールでの情報交換会と学生ハンドベルの素敵な演奏など、どれも記憶に深く残っております。

一方、本研究連絡会議の幹事会では、構成メンバーで議論を重ね、様々な改革に取り組んでおります。認定校減少に伴う予算削減に対する対応、自由時間研究における投稿論文区分の新設、J-stage バックナンバー登録、教材開発に向けた新企画の検討などです。引き続き、より多くの先生方にとって全国研究集会に参加する付加価値を高めてまいりますので、ご理解とご協力を賜りたいと願っております。

最後に、次年度の全国研究集会は、新しい元号での初開催となります。また、全国レクリエーション大会が今年開催された高知県をもって全都道府県を一巡し、次年度は二巡目スタートの大会となります。それらを踏まえ、幹事会で議論した結果、次年度の全国研究集会は宮城県仙台市を中心に 9 月 13～15 日に開催される全国レク大会に組み込んでの開催という案を提案させて頂きました。総会では過去の経緯や反省も合わせ様々な意見が出されましたが、慣例にはしないという事を確認した上で、最終的には了承されました。全国レク大会に参加されたことが無い認定校の先生方が多くおられます。来年は、一度に両方の参加が可能ですので、是非とも積極的にご参加いただければ幸いに存じます。皆様との再会を楽しみにしております。



平成 30 年度全国研究集会・総会 実行委員長  
立教大学 教授 / 公益財団法人日本レクリエーション協会 理事

## 松尾 哲矢

全国からレクリエーション教育に関連するさまざまな人々をお迎えして、立教大学において開催した「平成 30 年度全国研究集会・総会」が、120 名を超える参加者を得て、成功裏に終了いたしましたことは喜びにたえません。

立教大学は、1874（明治 7）年、現在の東京築地で開学し、1918（大正 7）年に池袋に移転いたしまして、2018（平成 30）年の今年、ちょうど 100 周年を迎えます。この記念すべき年に本全国研究集会を本学で開催いただきましたことは、大変有難く、光栄なことと存じます。

本集会では、公認指導者養成課程認定制度のさらなる充実に向けてさまざまな視点から情報提供や意見交換を行い、非常に有意義な集会になりました。これもひとえにご参加の皆さまの熱意と関係各位のご協力の賜物と心より感謝申し上げます。

さて、今年度の全国研究集会・総会では、日本パラリンピアンズ協会 会長の河合純一氏をお招きし、「パラリンピックと共生社会」をテーマとした基調講演を皮切りに、認定校教員の皆さまの日頃の研究活動の成果を発表する実践・研究発表、ワークショップ等、充実したプログラムとなりました。特に、初めての試みであった「ワークショップ」では、①介護・福祉分野 ②健康・スポーツ分野 ③保育・教育分野の 3 分野に分かれ、それぞれの分野で活躍される先生方からレクリエーションの授業を実施する際に使える教材やシラバスの立て方等についての提案をいただき、参加者との活発な意見交換も行われ、レクリエーション教育の充実に向けて多くの示唆と成果が得られたものと確信しております。

ご参加の皆さまには、本集会を通して得られた貴重な情報を、日々の教育活動に活かされ、今後益々レクリエーション教育の担い手としてご活躍・ご尽力いただきますようご期待申し上げます。

結びに、本大会の開催にあたり多大なるご尽力を賜りました実行委員の皆様、（公財）日本レクリエーション協会の皆様をはじめ、本集会の趣旨にご理解を賜り、ご支援いただきましたすべての団体の皆さまに対し、深く感謝申し上げ、挨拶いたします。

# 実施概要

## 1. 目的

公認指導者養成課程認定制度の充実を図り、課程認定校相互の連携や都道府県レクリエーション協会との連携を強化することを目的とする。

## 2. 実施体制

主催：公益財団法人日本レクリエーション協会 / 課程認定校研究連絡会議

共催：立教大学 コミュニティ福祉学部 スポーツウエルネス学科

主管：平成 30 年度 全国研究集会・総会 実行委員会

後援：公益社団法人介護福祉士養成施設協会、一般社団法人全国保育士養成協議会

## 3. 開催期日

平成 30 年 6 月 9 日（土）～6 月 10 日（日）

## 4. 会場

立教大学 池袋キャンパス 5号館 / 14号館 / ポール・ラッシュ・アスレティックセンター（体育館）

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 [アクセス] JR 池袋駅西口より徒歩約 7 分



## 5. 参加対象

課程認定校において、レクリエーション科目を担当されている教員、事務担当教職員の方々  
都道府県レクリエーション協会関係者の方々

## 6. 参加者数

課程認定校	122 名	都道府県レク協会	3 名
-------	-------	----------	-----

## 7. 日程

[1日目：6月9日（土）]

時間	プログラム	内容	会場
12:30～13:00	受付		5号館 1F
13:00～13:30	開会式		5121
13:30～14:30	基調講演	テーマ：パラリンピックと共生社会 演者：河合純一氏（日本パラリンピアンズ協会 会長）	5121
14:40～16:30	実践・研究発表		5124 5125
17:00～18:15	ワークショップ	テーマ：これを使えばあなたもできる！ レクリエーションモデル授業の提案 ※レクリエーション授業を実施する際に使える教材や、 全15回のシラバスの立て方等、実際に課程認定校 教員が講師となり、モデル授業の提案を行います。	5403 5404 5405
18:25～19:15	総会		5121
19:30～21:00	情報交換会		第一食堂

[2日目：6月10日（日）]

時間	プログラム	内容	会場
9:00～9:10	受付		体育館
9:10～12:10	体験プログラム	テーマ：パラスポーツを体験しよう！ ※車椅子バスケットボール、ゴールボール、ブラインドクライ ミングの3種目を実際に体験します。	体育館
12:30～13:30	ランチオンミーティング	①東京2020オリパラボランティア情報提供 ②今後の課程認定校事務手続きに関する情報提供	D201
13:30～14:00	閉会式		D201

## 8. 実行委員会一覧

氏名	所属校	氏名	所属校
松尾 哲矢**	立教大学	石渡 貴之*	立教大学
高野 千春*	平成国際大学	佐近 慎平*	新潟医療福祉大学
石井 友光	帝京平成大学	大橋 信行	帝京科学大学
沖 雅美	東京福祉保育専門学校	片山 昭義	浦和大学・浦和大学短期大学部
篠原 俊明	東京未来大学	清水 一巳	千葉敬愛短期大学

\*\*..... 委員長 \*..... 副委員長

(敬称略)

## 記録（基調講演）

- ◆日 程：6月9日（土）13:30～14:30
- ◆会 場：5号館 5121 教室
- ◆講演者：河合純一 氏（日本パラリンピアンズ協会 会長／独立行政法人日本スポーツ振興センター）

### 【内容】

「パラの成功無しにオリの成功無し」という強烈なメッセージでスタートした基調講演。講師は 1992 年バルセロナ大会の水泳競技で銀 2 枚、銅 3 枚を獲得、その後活躍を続けられ、パラ 6 大会出場で金メダル 5 枚を含む計 21 枚のメダルを獲得された河合純一氏であった。

講演の内容は「はじめに（障がいの理解）」「パラの歴史」「パラの現状」「パラのレガシー」により構成され、障がいを持つ当事者から発せられるメッセージは一つ一つに強いインパクトがあり、例えば「障がいとは、個人にあるのではなく社会の側にある」教員として学生に伝えているメッセージも、当事者の発言はその重みを再確認することができた。

2020 年の東京大会開催に向けて、IPC が目指す究極のゴールである「インクルーシブな社会を創出すること」、本当の意味で多様性と調和のとれた共生社会の実現の機会としなければいけないというメッセージが強く印象に残った。

まとめとして①ハードのバリアはハートでクリア、②バリアが気づきを促し意識を変える、③スポーツにおけるバリアの解消から取り組みを始めよう、④目指しているのはミックスジュースではなくフルーツポンチの 4 点を挙げられ、それぞれの良さを認め生かしあう、そのためにはお互いのコミュニケーションが大切であることが強調された。

自国でのオリ・パラ大会開催を間近に控え、気持ちを新たに再スタートできる基調講演であった。



### 【所感】

参加者から「障がい者の“する”部分に注目されがちだが、“見る”“支える”部分の参画についてどのように考えるか？」との質問に対して、見る部分については「アクティビティガイドラインを定め参加しやすい工夫がなされているが、席やスペースの確保やアクセスのことしか考えられていない、見てもらう工夫がまだまだ足りない」と回答、また支える部分についても「11万5千人のボランティアとして障がい者も参加できる工夫が今後求められる」と回答された。

他の参加者からはオリンピック・パラリンピックの準備段階として「障がい者と健常者のインクルージョン（共生）の工夫が模索されており、色々な立場の人が様々な取り組みを行っている」との現状報告があった。

2020 年を 2 年後に控え、河合先生のご講演は障がい者や障がい者スポーツに対して我々教員を通して健常者側の理解を大きく深める契機になったと思われる。

記録者：片山昭義（浦和大学・浦和大学短期大学部）

## 記録（実践・研究発表①）

◆日 程：6月9日（土）14:40～16:30

◆会 場：5号館 5124 教室

[発表スケジュール]

時間	発表演題	所属	発表者
14:40～ 14:53	レクリエーション・インストラクター資格取得者のニーズに関する研究 －群馬県レク養成講習会受講者を対象として－	高崎健康福祉大学	大家千枝子
14:53～ 15:06	本学におけるレクリエーション教育の意義について ～大学生の意識調査から～	札幌国際大学	本多理紗
15:06～ 15:19	スポレク指導者養成課程における指導の実践力を身につける カリキュラム構築に関する実証的検討	岐阜経済大学	古田康生
15:19～ 15:32	地域経済における介護予防とユニバーサルスポーツの効果： 「棒サッカー」を事例として	羽衣国際大学	片山千佳
15:32～ 15:41	情報提供（スポーツ・レクリエーション指導者 追加養成のお願いについて）		
15:41～ 15:51	休 憩		
15:51～ 16:04	幼児の体力向上のための保育者・スポーツ指導者への レクリエーション教育の効果	新潟医療福祉大学	佐近慎平
16:04～ 16:17	自由遊びにおける幼児の運動経験の実態	東京未来大学	篠原俊明
16:17～ 16:30	スラックラインの運動強度	帝京科学大学	大橋信行

※発表資料は、【資料 No.研-1】を参照



奨励賞受賞の篠原俊明 氏（東京未来大学）

## 記録（実践・研究発表②）

◆日 程：6月9日（土）14:40～16:30

◆会 場：5号館 5125 教室

[発表スケジュール]

時間	発表演題	所属	発表者
14:40～ 14:53	写真撮影を用いたナビゲーションスポーツのスポーツ・レクリエーションの アクティビティとしての実施可能性の検証	大阪電気通信大学	中井聖
14:53～ 15:06	写真撮影を用いたナビゲーションスポーツの大学生における人間関係 形成プログラムとしての可能性と今後の展開	京都学園大学	三宅基子
15:06～ 15:19	「コピペからのアレンジ力」としての「re-creation スキル」に着眼したか らだあそび試論 —レクリエーション教育と身体表現教育の融合に向けて—	久留米信愛短期 大学	新井真実
15:19～ 15:32	「中短♪音れくサークル」実践報告～音楽療法的効果を期待した 地域における音楽レクリエーション活動の取り組み～	青森中央短期大学	木村貴子
15:32～ 15:42	休 憩		
15:42～ 15:55	地域レクリエーション協会と課程認定校の連携授業による教育効果 —指導者像の具現化と資格取得意識の向上に向けて—	神戸医療福祉大学	田島栄文
15:55～ 16:08	課程認定校での資格取得と都道府県協会での活動について	龍谷大学	久保和之
16:08～ 16:21	東京都レクリエーション協会における課程認定校学生による レクリエーションプログラム発表交流会開催計画について	上智社会福祉専門 学校	師岡文男
16:21～ 16:30	情報提供（スポーツ・レクリエーション指導者 追加養成のお願いについて）		

※発表資料は、【資料 No. 研-2】を参照



奨励賞受賞の中井聖 氏（大阪電気通信大学）

## 記録（ワークショップ① 福祉・介護系）

- ◆日 程：6月9日（土）17:00～18:15
- ◆会 場：5号館 5403 教室
- ◆テ ー マ：「これを使えばあなたもできる！ レクリエーションモデル授業の提案」
- ◆講演者：小池和幸 氏（仙台大学）／ 田島栄文 氏（神戸医療福祉大学）

### [内容]

#### 『こよればこよるほどに…』

まず、田島栄文先生から色とりどりのお花紙が一人に1枚ずつ配られました。それを短冊状にちぎり、こよりを作って二人一組でこより相撲をします。学生同士の取り組みがなかなか始まらない時は、教師の方から学生に勝負を挑んで距離を縮め、勝った！負けた！と一喜一憂するうちに楽しい雰囲気教室全体に広がっていきます。勝つためポイントはできるだけ「こよる」こと！田島先生からは他にもトンチ文字、何でもビンゴやインスピレーションゲーム等々授業の導入（アイスブレイキング）に適した実技を紹介していただき、私たちは楽しんで参加することができました。

#### 『その場にいるみんなで解決する』

小池先生は学生が遊びを通じて、あらゆる場面で相手の身になって考えられるよう授業をしているそうです。例えば、「犬猫トーク」では犬派と猫派に分かれて良いところを言い合い、途中で役割を交代する。犬派の私としては猫の良いところはまるで思いつかない。猫派（＝相手）の立場になって考えてみることで、始めてその難しさに気づくことができました。また「男女ミックスで○人組を作る」という指示に対し、早くグループを作ることだけを考えていると、男女ミックスにならないグループができてしまう。「その場にいる全員が全体の事を考えて行動する。」学校の授業ではもちろん、働きやすい職場作りにも通じることだと感じました。

### [所感]

#### 『古い＝使えない』ではない！

何年も同じゲームをやっていて自分の授業がマンネリ化しているのではないかと不安に思った経験がある先生は私だけではないと思います。しかし、田島先生は昔の月刊レクリエーションを今でも授業で使用されているとのこと。また、ご紹介いただいたアイスブレイキングゲームは誰もが一度はやったことのあるゲームが多く、自分がやって楽しかった素材は学生にもきっと楽しんでもらえるはず！今後は自信を持って提供したいと思いました。

#### 『「あー楽しかった。」で終わらせない。』

また、「レクが盛り上がって良かった！でも…ゲームばかりで、学生は何か新しい知識を学べただろうか？」という不安を抱くこともあります。例えば、教室内に散らばった学生を自分の近くに集合させた時「もっと私の近くに集まりなさい」と言うことがあります。そんな時小池先生の授業では、エドワード・ホール氏の4つの距離の理論を紹介し、教師と学生の距離を実際にメジャーで計測してみせるそうです。このように、わかりやすく理論と実践とが結びつくよう勉強したいと思います。

記録者：沖雅美（東京福祉保育専門学校）

---

## 記録（ワークショップ② 健康・スポーツ系）

---

- ◆日 程：6月9日（土）17:00～18:15
- ◆会 場：5号館 5404 教室
- ◆テ ー マ：「これを使えばあなたもできる！ レクリエーションモデル授業の提案」
- ◆講演者：佐近慎平 氏（新潟医療福祉大学）／ 涌井忠昭 氏（関西大学）

### [内容]

#### 『活動分析の提案』

佐近先生の考案された「活動評価・分析シート」を使い、学生が「身体的」「情緒的」「知的」「社会的」の4つの観点から動きの評価をおこなうトレーニング方法を紹介していただいた。

#### 『関西大学のレクリエーション資格の授業の説明』

2010 課程認定校（初級障害者指導員、レクインストラクター）で、レクリエーション授業履修者 300 名程度。授業資料は、初回授業で全て配布している。授業で行ったことは、教育実習に行く上でとても有効である。

- ① 学生からの質問を受け、フィードバックをする
- ② 学生の行ったレクを冊子にして渡す。
- ③ しゃべっていい時間を作る
- ④ 障害者イベントに学生をボランティアとして派遣 を授業で行っている。

### [所感]

参加者は約 40 名。

佐近先生からは、具体的な活動分析の提案があり、実際に一つの動作を行い、受講者が動作分析を行った。

涌井先生からは、実際に行われている資格取得授業の詳細な紹介をいただき、とても参考になった。

参加者からは、両講師に対してより詳細に内容に関する質問が相次いだ。

両講師の講演は、内容的にもすぐに活用できるものであり、非常に有意義な講演であったと考えられた。

記録者：大橋信行（帝京科学大学）

## 記録（ワークショップ③ 保育・教育系）

- ◆日 程：6月9日（土）17:00～18:15
- ◆会 場：5号館 5405 教室
- ◆テ ー マ：「これを使えばあなたもできる！ レクリエーションモデル授業の提案」
- ◆講演者：岡山千賀子 氏（徳島文理大学）／ 築山泰典 氏（福岡大学）

### [内容]

岡山先生は、レクリエーション関係の授業構成を中心に紹介された。まず、「心の健康」ととらえるところから、フロア理論の視点から達成感を感じる活動を取り入れている。その中でも、活動のハードル設定が重要だと紹介された。モデルプログラムとして、ポスター作りからプログラム内容の検討とその進め方を考えていくという活動が紹介された。ポスター作りから活動を具体化させて考えていくという授業展開が示され、レクリエーションを教育保育に関連させて考えることの重要性を確認されていた。

後半の、築山先生からは、まずレクリエーションの教育とレクリエーションな学びについての考え方が示され、主体的、楽しさ、成長の学びを大切にしていること紹介された。そこには、レクにつなげる、レクリエーション・マインドとレクリエーションでつなげる、レクリエーション・ムーブメントの考えをもとにしているということも紹介された。そして、連続ミニツツペーパーでの対話やアクティブラーニング型の授業支援による、近隣幼稚園との交流事業などの具体的な学生の学びを紹介された。

質問では、クラフトについての具体的質問やホスピタリティーの事例についての質問がなされ、つくって遊べるクラフトに挑戦することで、完成する以上に感動が湧き出してくる。ディズニーでのホスピタリティーのあり方を例に示すことがあるとして紹介された。

### [所感]

クラフトやソング、ゲームといった保育活動の中で活用することのできる、あるいは保育技術として活用することのできる内容の紹介がなされたことに参考になる事例であった。参加者からも参考に取り組んでみたいとの声も出ていた。

また、学外の組織、団体との活動において、どのような連絡調整が必要かといった質問も出ており、具体的に学生のアクティブラーニングの場としての学外の組織とのかかわりをつくる点において難しさがあると感じる参加者もあった。岡山先生が保育の領域から、築山先生がレクリエーション教育の領域から授業展開の例を紹介されたが、養成課程において、レクリエーションの担当者の専門領域が保育領域なのか、保育以外の領域（レクリエーション等）なのかにより、学生の学び、実践にも特徴が表れており、本ワークショップを通して、レクリエーションの柱をおさえ、様々な展開の可能性があるという考えが共有されていた。

記録者：清水一巳（千葉敬愛短期大学）

### 【ワークショップ① 福祉・介護系の様子】



体験の様子



田島氏

### 【ワークショップ② 健康・スポーツ系の様子】



涌井氏



佐近氏

### 【ワークショップ③ 保育・教育系の様子】



岡山氏



築山氏

## 記録（体験プログラム① 車椅子バスケット）

- ◆日 程：6月10日（日）9:10～12:10
- ◆会 場：ポール・ラッシュ・アスレティックセンター（体育館）
- ◆講 師：斎藤尚徳 氏（川崎 WSC／車椅子バスケットボールチーム）

### [内容]

冒頭に車椅子バスケットのボールのルールとバスケットの説明があった。車椅子バスケットボールのルールは一般のバスケットボールとほぼ同じで、一般の競技と同じ高さのゴールを使用する。スピードや敏捷性、持久力に加えて、車椅子を操作する技術、シュートがリングまで届くための技術と筋力が必要とされる。特有のルールは、トラベリングがあり、車椅子を手でこぐプッシュは連続2回まで、3回プッシュするとトラベリングになる。また、選手には一人ひとりの障害の程度による、1.0点から0.5点きざみで4.5点まで、持ち点でクラス分けされている。コートに出ている5人の選手の持ち点の合計が14.0点以内ではなくてはならない。1.0点の腹筋や、背筋が機能しなく、座位バランスが取りづらい選手が乗るなバスケット車、3.0点以上のポイントゲッターが乗るバスケット車についても説明があった。

バスケット車の操作について指導があり、前進・後進、ブレーキ、ターンなどの基礎技術を体験した。後半は2コートで、10分の5対5のゲームを2試合実施した。最後に斎藤氏の質疑応答が行われ、活発な意見交換が行われた。



斎藤氏（写真中央）

### [所感]

参加者からは、シュートが届かない、想像以上に両腕に疲労が溜まるなど、車椅子バスケットボールプレイヤーの身体能力の高さに驚愕の声が聞かれた。斎藤氏のプログラム展開の上手さもあり、参加者は終始笑顔で主体的に取り組む様子が見られた。

バスケット車を所有する専門学校・短大・大学は少ない様子、多くの先生が初めてバスケット車に乗り、その機動性に驚いている様子であった。時間の経過、プログラムのローテーションが進むにつれ、多くの先生に疲労が蓄積していく様子も見られたが体験プログラムとしては満足度の高いように見受けられた。

記録者：佐近慎平（新潟医療福祉大学）

## 記録（体験プログラム② ゴールボール）

- ◆日 程：6月10日（日）9:10～12:10
- ◆会 場：ポール・ラッシュ・アスレティックセンター（体育館）
- ◆講 師：西村秀樹氏（日本ゴールボール協会 副会長） / 齊藤隼人氏（公式審判員）

### [内容]

まずは、ゴールボールで使用するボールを見て、触れて、振って、音を聞いて、弾ませて、踏みつけて、凹ませて…確認することからスタート。次にアイシールド（目隠し）を付けて拍手の方向にボールを転がし、ボールの方向や速さを確認する練習。視覚を遮断されると想像以上に動けない様子を、思わず笑いが… 続いて、基本的なボールの受け止め方の練習。横座りの状態から①手を伸ばす動き②脚を伸ばす動きに初挑戦。スムーズにシュツと身体を伸ばす講師の動きをお手本に、参加者の声だけがシュツ！ 身体の使い方が少しわかってきたところで、実際に転がってくるボールを止める練習にステップアップ。そして公式ルールの説明後、3対3でコートに入り、いよいよゴールボールのゲーム体験。初めは、コートの中で何が起きているのか分からない孤独感やコートの中で迷子になる不安感いっぱい、周囲の声だけが頼りのゲーム展開から、少しずつ感覚が慣れ、時にはファインプレーに大盛り上がり！ 最後に、講師と参加者で1対1の真剣勝負。参加者が全力投球したボールを西村講師が見事に止め、ゴールボールのスピードと迫力を目の前で実感。

今回はゴールボールという未知のスポーツを、西村講師、齊藤スタッフのわかりやすい説明とお手本で楽しく体験することができた。指導中の動きやタイミングの良的的確なアドバイスに、最後まで西村講師が全盲であることに気づかない参加者もいた。



### [所感]

「ゴールボール」は参加者のほとんどが見聞きしたことはあるが実際に体験するのは初めてという状況で、初めから大変興味を持って積極的に取り組んでおられた。基本的な練習やゲームの体験を通じ、音や気配を頼りにボールの方向や距離・スピード等を判断し、頭の中でイメージしながら動くことの難しさを実感するとともに、その面白さやゴールボールというスポーツへの理解が深まったという感想を多くいただいた。どのグループも体験終了後にさまざまな質問が飛び出し、早速自身の授業やイベントへの導入を検討したいと講師に相談される先生方もおられた。

この研究集会在が、認定校においてパラ・スポーツを楽しむことから学生達が「共生社会」について考えるきっかけになれば嬉しい限りである。

記録者：高野千春（平成国際大学）

## 記録（体験プログラム③ ブラインドクライミング）

- ◆日 程：6月10日（日）9:10～12:10
- ◆会 場：ポール・ラッシュ・アスレティックセンター（体育館）
- ◆講 師：水村信二 氏（明治大学）

### [内容]

ブラインドクライミングに向けて、まずクライミングの経験を実践した。クライミングの際には安全確保がもっとも重要であり、登っている人の真下に入らないこと、登り終わった後、まっすぐに壁から離れることが共有された。その後、壁の凹凸を触りながら、歩き、その感触を確かめた。次に、クライミングは手で登るのではなく、なるべく壁の近くに体を寄せ、足と腰を持ち上げて登ることがポイントとの説明がなされ、参加者はそれを意識しながら、3人1組で交代しつつクライミングした。

その後、アイマスクを装着し、ブラインドクライミングを実施した。見守る2人が必要に応じて掴む凹凸の位置を声で伝え、ブラインドクライミング実施者がその声も活かしながら登るというものであった。見守る人は、クライミング実施者が凹凸の位置を見失ったときのみ声を掛け、ギリギリまで補助はしないことがポイントであるとのことであった。さらに声掛けの内容は、凹凸の位置を伝えるのみで、「右手で掴め」「左足を掛ける」といったような動きを指定するような声掛けは、クライミング実施者がかえって混乱してしまうため、極力避けることも共有された。すべての参加者がブラインドクライミングを経験した。



水村氏

### [所感]

ブラインドクライミングは、第三者の声掛けが必要不可欠で、コミュニケーションのツールにもなり得るとの意見が多数出された。第三者として声での指示を行う際、色や大きさなど、目に見えている情報を伝えてしまうという場面が多数見受けられ、伝達内容を工夫することの必要性を実感している様子であった。

クライミングが手のみではなく、足と腰、つまり全身を使った運動となることを実体験から認識している様子が見受けられた。また、実際にクライミング施設設置に関わる経費などについての質問もなされていた。ブラインドクライミング自体に興味を持ち、大会などに見学に行きたいとの声も聞かれた。

記録者：篠原俊明（東京未来大学）

---

# 平成 30 年度総会 報告

---

- ◆日 程：6月9日（土）18:25～19:15
- ◆会 場：5号館 5121 教室
- ◆定 数：出席者 94 課程、委任状 196 課程であり、規約第 20 条に基づき、総会として正式に成立した。

## 第 1 号議案：平成 30・31 年度 役員体制について

顧問の福田芳則（大阪体育大学）氏より、平成 30・31 年度の役員体制（案）について、【資料 No.総-1】のとおり説明があった。

質疑応答の結果、調整中となっている九州・沖縄ブロックの幹事 1 名については、幹事会に一任することとなり、本議案は全会一致で可決承認された。

## 第 2 号議案：平成 29 年度事業報告について

九州・沖縄ブロック幹事の竹森裕高（九州龍谷短期大学）氏より、平成 29 年度の実業報告について、【資料 No.総-2】のとおり説明があった。

質疑応答の結果、本議案は全会一致で可決承認された。

## 第 3 号議案：平成 29 年度決算報告について

東海・北陸ブロック幹事の斎藤聖子（大原スポーツ医療保育福祉専門学校）氏より、平成 29 年度の決算報告について、【資料 No.総-3】のとおり説明があった。

質疑応答の結果、本議案は全会一致で可決承認された。

## 第 4 号議案：平成 30 年度事業計画について

北海道・東北ブロック幹事の南條正人（東北文教大学短期大学部）氏より、平成 30 年度の実業計画について、【資料 No.総-4】のとおり説明があった。

質疑応答の結果、本議案は全会一致で可決承認された。

## 第 5 号議案：平成 30 年度予算計画について

中国・四国ブロック幹事の白川祥孝（香川短期大学）氏より、平成 30 年度の予算計画について、【資料 No.総-5】のとおり説明があった。

質疑応答の結果、繰越金（約 500 万円）の活用方法についてさまざまな意見等があり、今後の幹事会で協議し、次年度以降の総会に諮ることが確認され、本議案は全会一致で可決承認された。

## **第 6 号議案：課程認定校研究連絡会議 規約の改正について**

幹事長の仲野隆士（仙台大学）氏より、現在の課程認定校研究連絡会議の実情に即した規約にするために、【資料 No.総-6】のとおり、項目見直しの説明があった。

質疑応答の結果、文言の一部修正の提案があり、反映した規約が全会一致で可決承認された。

## **第 7 号議案：平成 31 年度全国研究集会・総会について**

幹事長の仲野隆士（仙台大学）氏より、現在 6 月に開催している全国研究集会・総会の開催を、平成 31 年度については全国レクリエーション大会 in 宮城との合同開催する旨の提案があった。

質疑応答の結果、研究連絡会議として必要なプログラムの選定、総会の開催時期、合同開催することによるメリット・デメリットの精査等の課題が確認され、今後の幹事会等で引き続き検討することが確認された。

## 参考資料（実践・研究発表）

発表演題	所属	発表者	資料 No.
レクリエーション・インストラクター資格取得者のニーズに関する研究 －群馬県レク養成講習会受講者を対象として－	高崎健康福祉大学	大家千枝子	No.研-1
本学におけるレクリエーション教育の意義について ～大学生の意識調査から～	札幌国際大学	本多理紗	No.研-2
スポレク指導者養成課程における指導の実践力を身につける カリキュラム構築に関する実証的検討	岐阜経済大学	古田康生	No.研-3
地域経済における介護予防とユニバーサルスポーツの効果： 「棒サッカー」を事例として	羽衣国際大学	片山千佳	No.研-4
自由遊びにおける幼児の運動経験の実態	東京未来大学	篠原俊明	No.研-5
スラックラインの運動強度	帝京科学大学	大橋信行	No.研-6

発表演題	所属	発表者	資料 No.
写真撮影を用いたナビゲーションスポーツのスポーツ・レクリエーション のアクティビティとしての実施可能性の検証	大阪電気通信大学	中井聖	No.研-7
写真撮影を用いたナビゲーションスポーツの大学生における人間関 係形成プログラムとしての可能性と今後の展開	京都学園大学	三宅基子	No.研-8
「コピペからのアレンジ力」としての「re-creation スキル」に着眼した からだあそび試論 －レクリエーション教育と身体表現教育の融合に向けて－	久留米信愛短期 大学	新井真実	No.研-9
「中短♪音れくサークル」実践報告～音楽療法的効果を期待した 地域における音楽レクリエーション活動の取り組み～	青森中央短期大学	木村貴子	No.研-10
地域レクリエーション協会と課程認定校の連携授業による教育効 果 －指導者像の具現化と資格取得意識の向上に向けて－	神戸医療福祉大学	田島栄文	No.研-11
課程認定校での資格取得と都道府県協会での活動について	龍谷大学	久保和之	No.研-12